

現代青年の自己の変動性・多面性と適応 —自己構造の区分化モデルの観点から—

主査教員：安藤 清志

社会学研究科社会心理学専攻 博士前期課程 2年

小越 凌

◆ 問題

インターネット、SNSなどの電子メディアの普及を背景に、関係する他者の数が累加的に増えたことで、自己が多面化することの副次的な問題がさまざまな形で見られている。学生相談の場面では、人間関係の中で違う顔を見せる自己に対し、自己間の矛盾や葛藤をなるべく意識しないようにすることで問題を回避しようとする学生の増加が指摘されている。そのような学生が、自己の抱える問題について主体的に悩むことができず、ストレスに対し過食嘔吐や引きこもりなどの形で身体化する傾向が見られている。同様に、近年産業領域に置いて、職場では抑うつ的であるのに対し、職場を離れると元気が回復し遊びに出かけるような、一般に「新型うつ」と呼ばれる現象が若年層の問題になっている。これらの問題は、通信技術の発達や人間関係の流動化といった時代的な変化と、それに伴う自己構造の断片的なあり方が背景にあると考えられる。そこで本研究では、そのような多面化し断片的な自己のあり方を、Showersの自己構造の区分化モデルを用いて解釈し、関連する要因の実証的な検討を行う。

◆ 自己構造の区分化モデル

自己構造の区分化とは、人の持つ様々な自己側面に対し、ポジティブ／ネガティブな自己知識のどちらかのみがリンクされた自己のあり方である。区分化された自己構造は、自尊感情・気分の変動や、自我脅威に対する防衛的な反応といった不適応的側面と関連があることが検証されている。本研究では、現代の多面化・断片化した青年の自己は、相手に応じて変動し、状況に合致した自己知識のみが呈示された、区分化された自己構造を反映しているのではないかと考えた。そこで、現代青年の自己構造の区分化傾向を2つの側面からとらえ検討した。すなわち、現代社会や大学の環境に対する適応としての区分化(研究1,3)と、自己の変動・多面化の結果としての区分化(研究2,3)である。この2つの視点から現代青年の自己構造を検討するために、大学一年生を対象とする5月、7月、10月の3時点に渡る縦断調査を実施し、分析を行った。

◆ 研究の目的と問い

状況や人間関係に応じて変動し多面化する現代青年の自己のあり方に対し、自己構造の区分化の観点から、その適応的意義について検討することである。その際、本研究のリサーチクエスションは以下の2つである。

- 相手に応じて見せる自分を変えること、様々な人間関係の中で自己が多面的になることは、人間関係が流動的になった現代の社会環境への適応の中で生じてきたのではないか？
- 自己の変動、多面化の中で築かれる自己は、区分化されたものなのではないだろうか？

◆ 研究 1：自己の区分化の社会生態学的視点からの検討

研究 1 では、日本の現代青年における自己の区分化を、関係流動性の高まりと相互協調的自己観の相互作用としてとらえた、社会生態学的な視点から区分化との関連性を検討した。重回帰分析の結果、区分化傾向の説明変数として、T2 においては関係流動性と相互協調性の交互作用が有意であった。そこで交互作用について分析したところ、関係流動性の低い個人における相互協調性の主効果が見られ、関係流動性が低い場合、相互協調的自己観を持つほど区分化傾向が高いということが示唆された。一方で、T3 においては関係流動性が有意であり、関係流動性が高いほど区分化傾向が高いことも示された。研究 1 においては時点間で一貫した結果が見られず、調査時期によって関係流動性が区分化傾向と異なる関連を持つことが示唆された。

◆ 研究 2：自己の変動性・多面性と区分化

研究 2 では、自己の変動性・多面性と区分化傾向の関連について検討した。本研究は、自己が関係に応じて変動するほど、区分化傾向が高まると仮説を立てた。階層的重回帰分析の結果、関係に応じて自己の変動に対する主観的意識、および自己を変化させる動機と区分化傾向が負の関連を示され、自己を意図的に変化させる動機を強く持つほど、区分化傾向は下がるということが示唆された。一方で、T3 においては、自己側面の数が区分化傾向と正の関連が見られた。このことから、相手に応じた自己の変動は区分化傾向を下げる一方で、自己側面の数が多いほど区分化傾向が高まる可能性が示唆された。

◆ 研究 3：大学生の自己の区分化の経時的変化の検討

研究 3 は、大学入学後、時間が経つほど区分化傾向が高まるかについて、区分化傾向の経時的変化と、その背後にある要因を検討した。潜在曲線モデルによる分析の結果、5 月から 10 月にかけて区分化傾向の変化は認められなかったが、区分化傾向の個人差として、自己側面の数が有意であった。この結果は、大学環境に適応していく上で区分化傾向が高まることはないものの、自己側面の数が多い個人ほど、3 時点を通して自己構造の区分化傾向が高いことを示すものだった。

◆ 本研究の知見

以上の検討から、社会・大学環境に対する適応としての区分化に関する仮説は支持されなかったが、自己の変動・多面化の結果としての区分化については、仮説を支持するものと、仮説と逆の結果を示すものの二つの知見が得られた。とくに自己の変動性および多面性と区分化の異なる関連性として、自己を意図的に変化させるほど区分化傾向が低く、自己側面を多く持つほど区分化傾向が高い、という傾向が見られた。このことは、現代青年の自己のあり方を理解する上で示唆に富んでいる。人間関係に応じて変動し異なる自己を見せることは、ポジティブ／ネガティブな自己知識のどちらかのみから成る自己側面ではなく、両方が呈示された統合的な自己構造をつくる。その意味で、変動する現代青年の自己のあり方は適応的と言えよう。一方で、関係する他者が多く、自己側面の数が多い個人には、自己が区分化される傾向が認められた。自己構造の区分化の観点からは、多面的な自己は不適応的になり得ると言える。以上の研究を通して、現代の自己のあり方を区分化という観点からとらえた検討の結果、自己の変動性と多面性が適応に関して異なる影響を持つことが示唆された。